

山下 忠

(やました ただし)

略歴 昭和6年生まれ。犀川ダムに水没した二又新町出身。元金沢市役所職員。昭和40年頃より狩猟を始める。今も倉谷に日参し豊かな自然を楽しんでいる。

「日中はクマ撃ちに行っとるから、夕方なら暗なってしもうし、うちにおるやろ」

え?!クマ撃ちの話は過去形で窺うつもりだったのに…そんな現在形の話なの!と、びっくり。日曜の夜にと話を決め、行く直前に在宅確認の電話をいれるとしたが、7時を過ぎてまだ不在。ようやくつながったら、

「熊が獲れて、解体していたら遅くなった」という。ウー!テレビの向こうで「マタギが…」なら、ともかく、今日の金沢で熊を撃ってきたなんて…。明治時代まで遡らなくても、青森・秋田まで北上しなくても、そんな生々しい話が聞けるのだ!

「ねえ、ねえ、熊が獲れたんだって!お父さんも聞きに行こうよ!」旦那はため息をついて「わしゃ、送ってだけはやる」

私って物好き?

なお、山下さんと私は、倉谷近辺ではとりあえずの顔馴染みである。先の高三郎標柱設置作業の際には舟を出していただいていたし、秋の山小屋酒場では、車の入れる終点までザックを運んでもいただいていた。その軽四ジープには、七つ道具ならぬ不可思議道具が一杯積まれていて、それも興味深かったのだが…。

ともあれ、田村教祖の80日間倉谷修業中にも、貴重な隣人であられた。教祖様から、彼が野外研修施設・金沢市少年の森では炭焼き指導をされていること、ボランティアで倉谷麁村までの草刈りをされているなどの情報ももらっていた。

いくら物好きでも、いきなり「熊ハンター」に取材はできない。どんなおっかない人かと、こっちがビビってしまう。あの小柄で、温厚そうな山下さんなら…。こんなご縁を高三郎の神に感謝!

やたら探し回った涌波のお宅の玄関には、弟の嫁さんに分ける熊肉が、本当に置かれていたのだった。

テーブルをセットしたら、畏まってしまった山下さん。まず11期長岡先輩の撮影された、昔の倉谷麁村の写真をお見せしてスタートとする。

「これが、水上正太郎、尾崎、宮崎、東…」と、すらすら戸主の名前が出てくる。部誌ベル



クハイム13号では尾崎義雄さんにお話を窺っている旨話すと

「義雄さんは炭の検査員をやっていて、麁村の時はそのまま、県の林業事務所の職員になって…」

スポーツ振興課の尾崎敬志さんに、助成金のお世話になった話をする、

「尾崎の家の弟の方の、その弟の方。兄の、のりつぐも市役所やったな」

山下さん自身は倉谷出身ではなく、手前の水没した二又新町の出身である。10人兄弟のおじま(家督相続から外れる弟)であったため早くに町へ出たという。

麁村の際、倉谷住民はばらばらに移住したが、二又民は集団移住をしており、涌波4丁目11番のこの辺り一帯全部が二又出だという。山下さん自身は高尾に自宅があり、ここにも別家を構えて元住民の輪に加わり、倉谷通いの拠点としているのだった。

山奥の倉谷、二又、日尾、見定は、濃厚な血縁関係で結ばれていた。外との交流が少ないうえに、この環境で暮らせる相手であることが条件になる。不便で、社会保障もない時代には、濃厚な親戚関係による共同体を形成することが生きる知恵だった。

昭和38年、犀川ダム建設により二又は水没し、その上流にある倉谷も麁村になった。日尾、見定はそれ以前に麁村になっていたという。拳原山中腹には、私の現役時代にはまだ、見定の茅葺屋根を認めることができた。これも、山下さんは「下沢、羽場…」と、指折り数えることが出来る。沢沿いに3軒、山上には12~3軒の家があり、電気だけは入っていたという。

高度成長の時代、特にオイルショックの直前の日本列島改造論が飛び交った時代、金大ワンゲルがキスリングを列ねた山域でも麓村が進んだ。医王山麓の栃尾、小矢部川沿いの下小屋、中ノ河内…。

小学校がなくなると、もう麓村は避けられないと聞いたことがある。子供という未来が育てられないとなると、その親世代は麓村を決断できる。子々孫々のために、父祖伝来の地を去って行くのだ。単純に考えれば、車の普及は従来より山村の生活をも便利にしたはず。その便利は、より「不便感」を募らせ、町への麓村力を加速したようである。

ところで、そもそも昔だって、平地より山は不便だったはずである。「平家の落人」のように命が危ないから、人目を避けた山奥へ…は、その当座の理由としては納得できる。それが昔話になってもおかしく、なんで不便な山に住み続ける人がいたのだろうか。鉱山があった時代は別として、その後もどうして住んでいたのだろうか？聞く方が恥ずかしくらいだが、やっぱり私は当事者に聞いてみたかった。

「ほうやね。住めば都やさかい、それなりにこんなもんやと満足出来とったというか。なぎ畑もあったけれど、本業は炭焼きやったね」

「当時は、暖房は炭しかなかったさかいね。15kgを4貫というて、それが1俵やけど、少ない家でも5~600俵、多い家なら、1シーズン春から秋にかけて、1200俵出荷しとったね。一括して犀川農協に納めとった。寺津から下でない米はとれんし、馬車で炭を納めて、帰りは農協から米をこうて。ほうや昔は馬車駅もたくさんあって、10台も停まっとったかね。わしが車の免許とったんが、28年。ということは26、27年頃までは毎日馬車が通とったね。」

化石イメージの炭焼きが、基幹産業のうちであったこと、馬車が走っていたこと、そういう交通ルートを支える人達がいたことも、すでに私の「常識」の中にはない。すなわち、ほぼ自給自足で賄い、現金を山の炭焼きで得れば米他を購入できて、暮らしが立った。だからダム建設で麓村になるまでは山に住み続ける選択が続いていたのだ。疑問が解けてスッキリした反面、自分の常識の欠落ぶりに冷汗が出た。

山下さんは野外研修施設・少年の森での炭焼き指導もされている。「体験」のみが趣旨だから、焼いた炭は、施設内のバーベキュー用に回される。窯出しまで結構時間がかかることもあってか、昨年、今年、炭焼きコースはなかったそうだ。

もちろん山の暮らしで身につけた技術だが、

昔の炭焼き窯の跡は、こんな所だと思う高所にまで残っているという。山人達は原料、燃料を現地で調達し、仕上がった製品のみを担いで運びおろす。天の又のすぐ下にも窯跡があったそうだ。倉谷が鉱山だった頃、精錬のためにも多量の炭を必要とし、奥へ奥へと入り込んで行った時代があったのだ。

炭のために伐られ、精錬の煙で枯れ、樹木を失った禿山はしばしば雪崩・洪水をひきおこしたらしい。鉱山がなくなり、人が減り、山は緑を復活したが、ついには麓村で人はいなくなった。すべてが昔話の域になり、わずかの石垣のみが倉谷集落跡に残る。

今、高三郎周辺は、犀川源流自然環境保全地域、犀川源流森林生物遺伝資源保存林と何重もの規制がかけられる山域になった。

さて、倉谷といえばオロ口である。

「オロ口も、昔は今以上に多かった。やっぱり人がおらんがになってから、おらんがなったような気がするワ。」

「わしらも夏は避ける。あれおったら、何しとつても気が散る。特に倉谷部落から上行ったとこなんてたいへんやもん。目も口も開けとられん。尻こうすりゃ、一つかみ取れるもの。8月は行っても3回くらいや。行ったときやあの河原の発電所の跡の、わしら物置にしとるコンクリの建てもんあるやろ。あそこに梯子掛けて屋根上がってビール飲んどりゃ、オロ口こんワ。オロ口でもんな、下にワーワーておっけど、2~3mもたこなるともうこん。ほやから屋根にゴザ曳いてゆっくっとしとっけど。ほんでも夏は行かんワ」

山下さん達も、夏は20人程の仲間で、北アルプスへ出掛けているという。

その小さな発電所は自家発電であった。それがついてわずか3~4年で、倉谷は麓村になった。当時は二又も自家発電、見定は寺津に発電所があったため、もっと早くに電気はついていた。真下に取水口があったため、馬車道もない最も不便な集落であったに関わらず、番外の早さでついたのだ。そして日尾は、電気のつかないうちに麓村になった。

昨年2月私と学研の友人は、ヒマラヤトレッキングに出掛け、いかにも懐れっぽく、電気のない寒村を旅行記に描いたのだが…。日本だって30年前の山村はそうであったことが、もう抜け落ちていく。昔から経済大国であったような錯覚を私自身がやっている。

昔話を語る人もあとわずかなのだ。そんな車のない時代には、月ヶ原山を越えて、下小屋、滝谷、福光の方が金沢へ出るより近かった。ちなみに二又新町の者はほとんど、福光祖谷の本経寺の門徒だという。

「ダムからちょっと上手のカンダンという谷を詰め、尾根を越えて、オコダン、中ノ河内、滝谷、刀利、立野脇を通過して。あんで半日ぐらいありゃ、朝ちょっと早出りゃ午前中に着いたらしいワ」

「年寄でも、ちょっと寺への土産持っても登って行けたらしいワ。金沢な、半日ぐらいで着かんわいネ。わしらかて、今でもホンコサ（本恩講）いうたら、福光や。金沢にあってもよさそうやけど。昔はそっちがあたんまいやったがや」

「二又からやったら、ちょっと下がって、カンダン上がって。きれいな道ついとった。尾根んところは今見ても、掘り割りみたいが見えるワネ」

昨年、標柱作業の帰りに田中さんが迷い込んだ谷だ。秋草が茂っていたばかりではない。私が山菜採りの踏み跡とばかり思っていたのが、昔の山越え道だったのだ。

車では大回りの必要な場所が、山の反対側にあってびっくりすることは多い。とんでもない辺鄙な所へ来てしまったように感じていたのにそこから今度は別の文化圏が始まり出すことがある。人がもっと速者に歩いていた時代、山奥は決して行き止まりの山奥ではなかったようだ。他国への最短距離、それゆえの人の行き来もあったようである。

私は、カ丸さんの調べられた犀川ダム周辺の谷名図を広げた。カ丸さんは、これを調べるために、仕事があつた夜、倉谷を何度も訪ねた時期があったという。住民の方は、谷名を知っていても地図の見方を知らず、何度も訂正するはめになったそうだ。その上、谷の名前なんて、面白くもない話より、熊撃ちの自慢話の方にすぐ脱線してしまったという。

撃ち方は雪庇の蔭に隠れ、追い上げられてくる熊を待つ。自分の方へかぶさっている雪庇に立往生した熊に、銃を押し当ててズドン。それでも、右往左往しかできない熊にさらにズドンで仕留めたそうだ。

「はあ、よお調べてあるもんやね。日尾の池も出とっし。ほやけど、今日わしらが熊獲ったところは、ここに出とらん。あんまり里すぎで」

「熊は、だいたい今年らも、犀川ダムから上流で全然気配ないね。何でか知らんけど、里ば



これが、私がお邪魔した日に獲れた熊。

12月16日15時30分頃 雌 63kg

平沢川上流 尾乃谷 赤倉展望台の向かい
参加者15名

っかし。こないだから2～3頭獲ったがも里ばっかし。この地図に出とるとこで、一つも獲とらんわ」

《里とは、つまり、人馴れしたとか、そういうことなんですか？》

「何か、人間のおらんとこに熊もおれんがなかな。昔や、倉谷、二又、見定や日尾にも人がおったさかい、そこらにも熊はおったけど。何かそんな気がするわ。獲かてほやろ、山におれんで里へ出てきとる」

「倉谷の辺は、昔植えた天然の栗やらたくさんあつけど、全然出てきとらんさかいね、熊は。今年の猟期は11月15日から解禁で始まつとるけど、この地図ん中では獲れとらん。ゲートよりこっちはっかりや」

初耳ながら、すごいことを聞いた気がする。人を避けてひたすら深山に籠もってもよさそうなのに、人が出没するような環境でないと熊は住んでいられないらしい。つまり、人の作った物を食べるという意味ではなく、人が出入りするような環境で育つ類の野生植物が、熊の食性に重なっているのだ。人が町へ出てしまい、その結果、熊も町近くにひっぱられて、一般人とまで異常接近してしまうケースが増えた。それが、人馴れしたとも見えてしまうらしい。

山下さんは「熊の方が人間を恐がっている」という。熊が人間を襲うのは、自己防衛。この

頃は、温泉街で熊が出た、襲われた、人馴れしたのとやかましい。しかし根本的に、「熊は人を食わないが、人は熊を食う」の食物連鎖上の上下は決まっている。だから人馴れしたの、鉄砲で撃たれた経験があるののないの、人が鉄砲を持っているのいないのに関わらず、彼らの本能の中にまず「ヒトは、自分を襲って食べる恐い動物」が、刻みこまれている。だから、襲われる前に、牙や爪で応酬、逃げようとするのだ。そもそも食物にもならないものを野性動物が狙うはずはなく、不意に出くわして吃驚するのは熊の方であって、恐怖のあまり向かってくる…それを人間の方が「襲われた」としているらしい。

今日は12月16日。温暖化したとはいえ、もう医王山は白い。《熊も、もう冬眠しているんじゃないんですか？》

「いや、もうしばらくは…。もちろん冬眠に入ったのもおるやろうけれど、まだうろうろ歩いとる」

「今日は丁度、近い犀鶴林道（駒形の橋を渡り、鶴来につながる林道）を上がっていく足跡を見付けて、追い掛けて追い掛けて…。仕留めたんが夕方遅かったから、帰りも遅なってしもて」

《お仲間は…。やはり、元倉谷住人、二又住人ということなのでしょうか？》

「ほうや。金沢市内やったら、どこに住んどっても、石川県猟友会金沢支部の会員にならんなんし、ここらだけでも10人はおる」

「わしに、隣に、ぶしさんに、荒井保に…このへんぐるうっと。昔やもとおったけど、やっぱ年令的なもんもあつし。わしかてそろそろ引退せんなんと思とっけど」

「ほうや、昔は各家庭に、免許持つとる持つとらんに関わらず、銃があつたもんや。子供時分から、親の見よう見真似で、こっそおつと、撃てるがになつとつた。昔やそんなんして、のんびいっとしとつたもんや」

「ほうや終戦頃までは、そんなもんやつた。戦後になってからや、銃刀法やが決まって。終戦前までは、免許がどうのやとか言うたらんかつた。霞網かて、ほうやつた」

山の住人には当然の生活道具として銃が入り込んでいたのだ。《それはどんな銃だったんですか？》

「やっぱ旧式のもんやつた。今とは全然。たまにカチンと不発やつたり、あてがいなもんばかりやつた。今はほんなことない。銃の性能なんてものすごお、いいがんなつた」

「熊であろうと猪であろうと、今はライフルやし。200mから300mくらい訳ないし、眼鏡もつ

いとるし、問題ならん」

「私らの子供時分な、銃なんて槍と変わらんようなもんでなかつたかな。勢子かけて、追うて、追うて、よお接近してから撃つとつたもんや」

《いったい、一シーズンにどれだけ熊は獲られるものなんですか？》

「11月15日から翌年の2月15日まで、これは許可制限なし。グループであろうと、個人であろうと、何頭獲つてもいい。それ以降は、石川県の場合、金沢以南ということやけど、金沢支部、石川・松任支部、それは白峰も含めてやけど、加賀・江沼支部、小松・能美支部、その4つの支部にそれぞれに頭数を制限しての許可が出る。それは4月1日から5月31日まで、有害鳥獣駆除という名目で」

「金沢の場合、今年は6頭、去年は10頭やった。しかも団体で獲ることになつとる。それは、先の猟期中に獲れた数で調整しとるみたいやね」

山下さんの目から見て、熊は里近くへ出てきているだけではなく、頭数が増えていると感じるとのこと。ちなみに有害鳥獣駆除の猟期は4月1日から、5月31日までであるが、今年は制限数の6頭が初めの2週間のうちに、里近くですぐ獲れてしまったという。小さい熊は獲らない、親子熊も獲らない…そうしてさえ簡単に目標数に達してしまう。

「昔、春の熊いうたら犀滝やら、犀滝の上までも行ったもんやけど、今そんなとこへ行かんでも、里山でもう頭数制限に達してしまう」

「昔はいくら獲つてもいいという時期でも、倉谷、二又のあつた時分でも、10頭…10頭獲れた時と獲れんかつた時があつた。そんなこと思や、今はすぐ獲れるさかい、増えたんやないかね。保護に重点をおいとるから、増えたんとちごかね」

「おとつても、湯涌の畠尾の陶石山からと、高尾山からと吉次山へ上がる、あそこに登山道あるやろ。あそこすこし上がって行った所の登山道にきれいに踏み跡があつて、誰やろおつかし、こんな時分にもう登つとる人がおるがかと思つたら、熊の足跡や。登山道をきれいにあがつとるがや。ははん、これやつたら、登山する人が熊におうたということになるんやなど、わしや思たわ。道のあつとこぼっかり歩いとるもん」

「熊かて、やぶのないとこの方が通りやすいしね。あの少年の森んとこの、あんな近いとこの登山道も、きちいんと歩いた跡あつたわ」

えーっ！昨年、私達が標柱を立ててきた所だ。何か身震いの心地である。《いつまで、熊は出歩いているものですか？》

「20日頃までは出とるね。正月まで、歩いとるのもおるわ」

《それはまだ食物を探してるんですか？》

「その頃はどのみち食べもんはないわ。一頭一頭の性格やね」

「柿とつとるとかの騒ぎになるがは9月10月の猟期前や。11月になったら里（人家のそば）へは出てこん。葉が落ちてしもやろ。山が明るうなって、身隠す所がなくなってしもと、もう近寄ってこん」

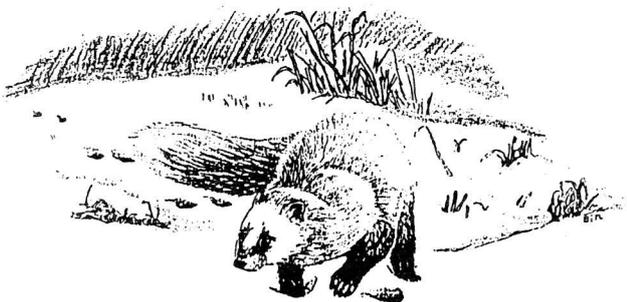
「夏から、9月下旬、10月までや。蜂蜜が狙われたやら、柿食われたやら。猟期の頃にはそんな近くには出てこん。猟期になったら、こっちが熊を探しに行くさかい、熊が出たの情報も入ってこん」

「熊が出た…の騒ぎになるのは猟期前の話やから、その頃は団体行動しか出来ん時やし、行政の市役所から電話が入ったり、農林総合事務所から連絡があったり、地域の人からの電話があったり。そうなると、有害鳥獣駆除という名目で出ていくことになる」

猟期を聞いた後には、また何で冬に？の疑問がわいた。農閑期にあたるからか？とまで思った。

猟期については、猟を生活・趣味にする側と、世論や世界的要請の野生動物保護の立場をとる行政との間に、当然の攻防があったらしい。昭和40年代までは11月1日からが猟期であり、それが15日に繰り下げられるにあたっては、では終わしも2月末日まで繰り下げにと、猟友会も粘ったらしい。そのもともと以前は無制限であった訳だが、すでに時代は動物保護に向かっていた。すなわち、動物の子育てが終了している冬であればと、猟期が定まり、免許を持つ人達に許可が出るのだ。熊、猪以外の毛皮獣、キツネ、テン、イタチ、トバ、ハクビシン…すべて、11月15日から、1月31日までが猟期だという。

その頃、動物達は雪に足跡を残すことになる。「とんでもない動物・人間」は、彼らと知恵を絞っての狩りをやるのだ。気の合ったメンバー同士で、或いは単独で。



そんな猟で山中に入る時はスパイク長靴を履いているとのこと。年内はそれ。もうしばらくしたら、長靴にかんじきとなる。スパイク長靴はかんじきの紐を切ってしまうためだ。そして雪のしまる春はまたスパイク長靴に戻る。

ライフルは3kgぐらいあるという。それに弾、食料、結構ザックに担ぐことになる。それでも登山をする人に比べれば軽いもんやという。熊を追い続けなければならないのだから。といっても、今はハンディの無線がある。常に仲間と連絡を取り合い、ロスなく追い詰められるようになった。

山下さん達は犬を連れていくことはないという。犬に追われると、熊はすぐ木に登ってしまうらしいが、狩猟犬としての訓練がいるらしい。犬を持たなくても、地形を熟知している彼らは、無線も駆使して、追い詰めて行くのだ。

もちろん彼らは目がいい。「あそこにおる」「おお、おるな…」と、分かるという。

「知らん人が見てもわからん。ハンターの目がある」という。

単独で狩りをする人には、料理屋に売る人もいるらしいが、売るほど獲れるわけではない。彼らはグループで獲って、飲んで、騒いで、回りにも戦果を分けて、それでおしまいということだ。

私なんかも、たかが、ワラビ、ウドが獲れただけでも結構嬉しい。食費がういたという換算した喜びではない。また、そんなわずかな山の幸を、山仲間達ははとも簡単に分けてくれる。

私達の記憶の底の底に、遠い昔の食物を見付けた喜び、それを仲間とわけあって今日の恵みを喜びあった記憶があるようにも思える。

《もちろん地図なんて、使わないんでしょうね？》

また、馬鹿な質問をやってしまったみたい。いかにも可笑しそうに

「ああ、山行くもんな、地名なんて全部わかってる。『どこそこの、こんなとこや』言うたら『ああ、わかった』て、もんや。そつりゃ詳しいって」

「『カシノダンのここや』『イヤダンのここ上がったとこの、檜の木んとこや』とか『日尾の尾根の、オビヨダン上がったこんなとこや』言うても、全部分かる。そりゃ、山入るもんやったら、深瀬であろうと、内川であろうと、ずうっと、みんなわかってる」

まさに我が家の庭のごとく…その中で、熊追いのゲーム(?)が始まるのだ。

《もちろん、登山と違って、全部、藪ですよね？》

「ほっぴゃ藪ばっかりや。上がったり下りたり…。今日なんか雨よりわっきゃ悪い。枝にみんな雪ついとるやろ。滑るワ、合羽着とつても衿とこからザーと入ってくるワ…もう、ずっくずっくや」

「こんなひどいこと何でせんなんがやと思ひながら、一晚寝りゃ、まった行かんなんて気になってしもて…。やっば、病氣やワ」

もう何でも聞いてみる。《じゃ手の方は、皮製のとか、何か？》

「軍手や。猟友会のもんはみんな軍手や。ずくずくになったら、絞って、また絞ってでつこととる」

「銃持とるやろ。引き加減やらあるし、厚手のもんな使えん。ほんとは素手が一番いいがや。足なら厚手の靴下やらあるけど、手はそんなもんや」

「それでも、追うとる間は汗もかいとるし冷たない。終わってから、背中から何から、そくそくになんがや」

《特に変わった持ち物とか…》

当たり前のお握りやら、缶コーヒーやらだという。もちろん各自、一晚以上過ごせるだけの食料は持っている。酒は持っていかない。せいぜい車まで。すべてが終わってからの楽しみの時間になってからだ。

《一晚以上の食料…テントは持たないですよ。予定外の山泊りになるなんてことはありませんか？》

「一年に一べんあるかないか。そうなりゃ、火たいて、雪の上でも火たいて。そんなための灯油やら…あのガムテープもよお火つくがいね。あんなもん必ず持とって」

「生木に火ついたら、がんに火おこしゃね（テントを持たなくても十分暖を取れる）。銃は必ず持とるし、折り畳みの鋸も、山入りや持とるし」

「ほやけど、ほんなことは何年にいっべんや。無線あるもの。『ここにこんなんになった。弱ったあ』て言や、町からでも走ってきてくれるもの。車の性能がよくなったんと、連絡網が発達したがと」

「わしの軽四でも、今日や40cmの雪やあつても行くもの。ジープやら何やら変わったものついとる車かて友達や持とって、今じゃブルドーザーなみやぞいね。」

「昔や、わが足しかないもの。よお、泊まらんなんことはあつた」

「ガスバーナーやらは、持ってかん。それは車には置いてある。ラーメンから、缶ビールからワンカップから。それこそ車には、何日でも泊まれるほど積んである」

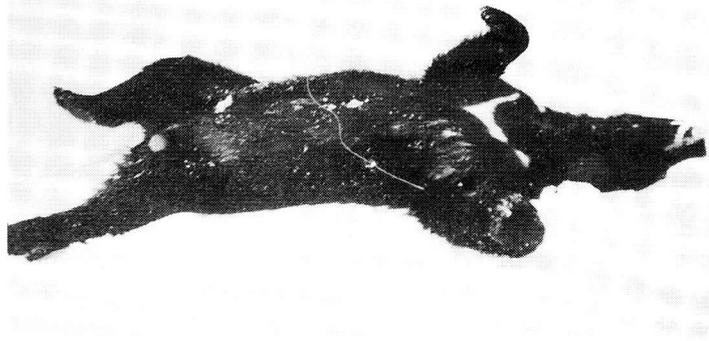


ここに見覚えありますか？そう、あそこです。

12月22日13時30分頃 雄 75kg

犀川ダム下流1km オビヨ谷入口

参加者16名



山下さん達は、福井、京都へ遠出することもあるという。それは当然狩猟期間の間ということになるが、福井へ行けば福井の免許、京都府なら京都府の免許を取り、25,000円から6,000円以上の免許料を払うという。

狩猟期間では北海道が特別で、10月1日から1月31日までとなっており、主に鹿が獲物になる。ワゴン車に食料から、寝袋からを乗せ、何日も狩猟を楽しむ。山下さんの近くにもでかけていく人がいるという。

《熊の解体って…どれくらい時間がかかるものですか？》

「ほんなもん馴れとっさかい、30分から1時間。そんなもんや。後は肉の仕分けくらい」

「今日は、安全週間やし、年の暮れやし、あんまし遅ならんとこ言うて、帰ってきたんやけど」

「いつもは『上がり』いうて、熊の骨から何からいっしょくたに煮て…飲んで、ああやったこうやったと話しとったら、ほんな『あがり』やとったら、いつも10時やら11時やらになつてもわいね」

わかる気がする。知恵と体力で追い詰め、仕留めて、獲物を分かち合う喜び…ずっとヒトはそんな狩りをやってきたはずなのだ。熊がヒトを恐れるはずなのだ。

《まず、熊胆を探るもんなんですか？》

「ありゃ、今の時期はないもんや。ないいうか、人間もほやるけど、物を食べとる間は溜まらんもんや」

「こんで小さい方やけど」

つぶれた風船、サポテンの干乾びたような実物を見せていただく。中は艶のある暗緑色の結晶だ。胆嚢と、胆汁ということである。

「これを米粒ほど削って。にっがい、にっがいもんや。こんで、干す前は、茄子くらいのもんや」

「毛皮は、今で、欲しがらんわ。欲しかったら何枚でもあげる。わしら山行く時は尻にしとるけどね。今、尻皮しとらんもんけ？」

機能的だと思いますけど、ちょっとスタイルとしては…

熊の写真は、証拠として出さねばならない場合もあって、何枚も映したのがあるそうだ。黄色のパンフレットのような書類には熊の形が描かれていて、そこへサイズを書き込むことになっている。熊の大きさは、手、そして、年齢は牙、さらに大腿骨でわかるのだそうだ。

さらに雌の場合、局部、子宮、卵巣を調べ、お産の経験も報告する。雌は四個の乳首を持ち、経産熊はその回りの毛が白くなっている、それでも分かるという。

年齢は肉の色にも出るそうだ。若い熊なら、ピンク色、年をくったのはどす黒い烏の肉のような色をしている。さらに肉に虫が入るようになる。木綿糸のような寄生虫で、煮たり焼いたりして食べるからいいものの、虫がいるのが常識だ。寄生虫といえば、10m以上もある腸から、これまたミミズのような虫が山ほど出てくるそうだ。こんなに腹にわいていたら、栄養をとられてしまうのではと思うほどだが、熊はころころに太っているという。

もちろん胃の内容物、何を食べていたかも大事だ。今日の熊の胃袋からは棒ダラの黒い実が黒作りのように出てきたという。



そうやって熊を撃っていたら、怖い目にあつたことだってあるのではないだろうか。

「やっぱ、熊に謝つたことある。ああ堪忍してくれ。わしゃもう、こんで、こんなことしんさかい…言うたこともある」

「ほうや、山ぶどうが棚のようになってひょいと見上げたら天井の高さから熊の足がぶら下がつとつて、熊な、腹ばいになって食べとつたわいね。熊かてびっくりしたがやる、フー言つておっかけて来たわいね。でっかい立ち木の蔭に隠れたら、あらあつてもんで、そんで避けて向こうへ行つてもた」

「1回、背中のごこんとこ、縦に爪跡ついとるワ。あん時、チカーとして、あら痛かつたなと思つて立ち上がったら体中、血だらけ」

「ありゃわしが悪かつたがや。遠いとこの熊撃つて、熊なころころと落ちていったさかい、ありゃ、あんなんでも当たるがやなと思つたら、すぐそこへ熊が来てしもた」

「熊にすりゃ、どこでそんな目におうたがや、どこに人がおるがかわからんがやね。ただもう痛いし」

めくら減法逃げた先に、山下さんが居合わせたことになったのだ。

「見つたら目の前に熊が来とるがや。もう銃撃つヒマもないし。あらあ、こりゃ駄目や思つて銃も捨てて、そこにあつたブッシュの蔭に伏せたがや。その上をこうして乗り越えて行つたわいね。ほしたら背中がチカーツとして。起き上がったら、春の残雪期やつたさかいね、そこらじゅう血だらけ。こんな大怪我してしもたかと思つたら、そりゃ熊の血やつた」

「その熊のこつちや射止めたけど。背中まくつてみたら、何枚も厚いの着とつたがに、みんな切れてしもて、黒いがに爪痕ついてしもとつた。オロナイン軟膏塗つて、2、3日したら痛いも治つてもたけど」

「熊はやっぱ、人を襲うがでないとわしゃ思つた。自分を守るために、むこてくるがや」

「熊におうた現場見たら、女の人の髪、かつらにしたほど落ちとった。爪で引き裂かれて。去年猟友会の人で、長いこと入院しとった人も、鼻と目玉とこんなんにえぐられて」

「ひどいこっちゃひどいわね。ほんでも熊にすりゃ自分を守るため。決して最初から人を襲てやろと思て、狙とるがではないとわしゃ思うわね。肉食でないがやしね。熊は人間がおとろして、そうするがで」

「ひどい怪我は何べんも見とる。中には死んだ人もおる。医王山のばあちゃんも気の毒なこっちゃったけど」

「ほんとの奥山やと熊も住めんし。人里にちょっと出てくりゃ、ゴルフ場なとるし、尾根越えてあつりゃ賑やかやと思やスキー場になつとつし。熊かて、おととこがないがや。奥山やいうたかて、そこらじゅう林道入つとるし。林道歩いとりゃ、今日みたいなもんや。わしらに見付けられて殺されてしもし。熊かて気の毒なもんや」

「ほうや言うて、山の住人にすりゃ、ゴルフ場やらスキー場作らにゃ、人来んし、暮らしていかれんし。一概に言われんけど」

「林道かてそこらじゅう入りすぎとるがや。町も山も一緒や言うて、どこんでもドライブに入ってくる。ほして『熊出た、熊出た』言うて騒いで。熊が出てあたんまいのそこへ入って来て、騒ぐがや」

猿は狩猟対象にはなっていない。この頃は暖冬のせいもあって、かなり数が増え、離れ猿が町中まで出没するようになった。昔はサルも貴重な蛋白源であった。

「わしらの子供時分な、『今日は猿獲りやぞお』と太鼓たたいて触れまわって、みんなして猿獲りしたもんやった」

人間に食われなくなった猿は確実に増えており、山下さんもしばしば山中で遭遇するという。もちろん猿は人間を食うわけではないから、襲ってはこない。体も小さいし、威嚇するだけである。ただ彼らは伶俐だから、こちらが鉄砲を持っていれば遠くで、持っていなければ近くまで来て牙を剥き出して威嚇してくるといふ。

山下さんが子供の頃には、猿だけではなく「今日はシシ狩りや」の触れが出てのカモシカ狩りもあったという。そのカモシカは保護獣となって増え、セドで見かけるほど里近くに生きるようになった。猪も増えたが、内川、犀川あたりに出没で、まだ里には近付いていないようだ。

「雪に弱いとは？」と、また、愚かな聞き方をしたら



12月21日11時頃 猪 雄 約 180kg
内川ダム堂町地内 風嵐林道2号線
参加者15名

加賀市や小松市の山間部では良く見られますが、金沢市では珍しい。京都や福井など他県へ出られるベテランハンターも、こんな大きいのは珍しいとのこと。

(写真の日付からも、猟期には頻りに山に入られていることがわかる)

「餌がとれんやろいね。あれら、葛根やら、山芋やら、沢蟹やら食べとるし。猿みたいに木の皮を食べるわけでもなし。熊みたいに冬眠できるわけでもなし…。餓死してしもがワネ」

本当によく、動物の生態をご存じである。寒さが苦手なのか？と思う自分が恥ずかしい。ようするに私の発想の中に「頭痛のタネの食欲」の悩みはあるが、「食べられなければ死ぬ」の発想はゼロなのだ。生き物として、もうおかしい方なのだと思う。

猪の肉は、京都、福井それぞれに味が違うそう。それも食べ物の違いからくるのだという。その点、山の物を食べていた昔のカモシカの肉はうまかったという。畑の物を食べるようになった動物の肉は、においがするそう。におい？これも高い牛肉なら柔らかい程度の味覚しかない私にはわからないことだ。

兎はめっきり減ったそう。…実は、この日の取材の帰り、タクシーを呼んだのだが、「熊撃ちの話聞きに行っていた」

と話したら、運ちゃんの幼い日の兎狩りの話が
始まってしまい、降りるまで興じてしまった。
私も蛙爆弾で遊んだ（程度の）話で応じていた
が…。

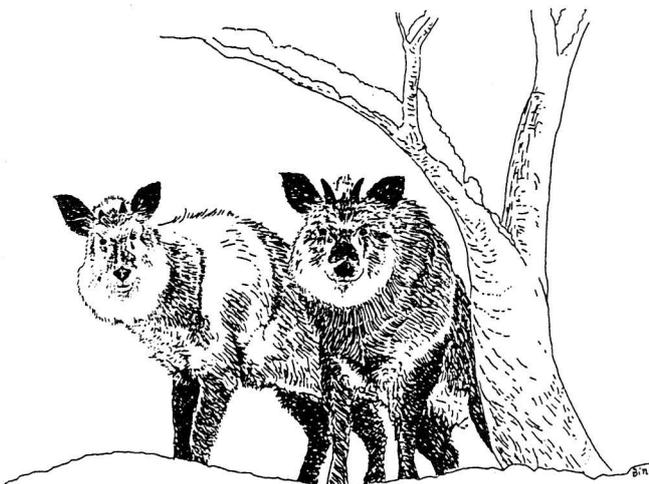
そうなのだ。昔は、子供でも回りの動物と知
恵比べをやり、動物を狩って殺すことも、皮を
剥ぐことも出来た。それは家族の称賛をあげ、
家族の食卓を潤した。新しいゲームソフトを買
ってもらったこととは比べものにならない、喜
びがあったのだ。

閑話休題。ともあれ、兎が減ったのは、キツ
ネ、テン、イタチなど天敵が増えたためではな
いかとのこと。兎はそれら肉食動物の主食にな
っている。また、トンビ、タカなどの猛禽類に
も捕まってしまうとのこと。

畑を荒らすといえば、繁殖していたのが逃げ
て野性化したハクビシンは、人を怖れず畑に近
づく。これは木に登る習性があるという。

すなわちハンターは、それぞれの動物の食べ
物、習性を熟知している。どんな所に棲んでい
るのか？どんな行動パターンをとるか？その知
識と地理を頭において、獲物を見つけだし、追
い詰め、仕留めるのだ。まさに、全ての動物に
おいて恐ろしいのは、知恵を持ち、共同戦線を
張る「ヒト」である。

山下さんは明日県庁の「カモシカ学会」に出
られるそうだ。元々は、白山自然保護センター
が主役で、教育会館の文化課が窓口になってい
る。今から8日間…2日間は聞き取り調査、6
日間は現場の跡どり調査をやるのだという。カ
モシカの分布は、ひがな双眼鏡で確認している
訳でも発信機をつけている訳でもない。ハンタ
ー達、カモシカの習性を熟知している人達が、
カモシカの出没しそうな地形の、餌となる木な
どを見回って、ここまでは分布しているの判断
を下すのだ。山の民の知恵と経験に頼り、薄謝
程度で行なわれているのが実態である。



そんなふうには山は、生き物がからみあって生
きている所だ。ちなみに山下さんは、湧き水は
ともかく、沢水は飲まないそうだ。

「年に何頭も見るワ。沢ん中にカモシカが死
んどって、腐敗してぶくぶくになっとなって。熊
の糞から、兎の糞から、猿の糞から、ありゃ全
部沢へ流れていく。沢で、そんなもの集まる
とこや。イワナも住んどるてことやけど。あん
まり飲まん方がいいやろね」

水場の基準は、大腸菌がいるかないか？上
流に小屋や牧場、メインの登山道が交差してい
るかないかで判断されているようだ。そんな
視点の中にも、山に他の動物がいることや、地
形的に沢というものは山の下水道も兼ねている
ことへの意識が抜け落ちている。

もっとも「泥水だって、水は水」の地域・状
況もある。職業病かつ汗掻きの我が家は、当然
ペットボトルを山小屋で買うことになるが…

「大きなグループなんですな」

「はい。代表して…」

恥ずかしくて二人分だと言えなかった。

「カルキもトリハロメタンも入ったらん分、
水道水よりきれいや。うまい！」

よりは

「線虫も回虫も、自然の一員や。お互い様や
と思うて飲もう」

が、より正確である。（これでまた、飲めなくな
った…）

今、倉谷に通う人は限られているようだ。い
わゆる若い人達には、そうも懐かしいと思える
場所ではなく、古い世代の中での、特に山が性
にあう人に限られているらしい。誘っても、ポ
ートが横付けできる時期でないと嫌がったり、
年中倉谷通いの山下さんは、やはり珍しい方
の人なのだ。

冬至に近い今も、朝6時には家を出て、山を
めざす生活だという。もちろん雪がきて、そろ
そろ軽ジープも動かし辛くはなってきた。今の
ところは山雪という感じで、意外に山の方は積
もっているという。

「山雪やね。今時分に倉谷に行って、一人し
ずかあに泊まると、楽しみなんやけどね」

うわ！そこまではやれません。ほんとにお好
きなんですねえ。

熊の他にはゼンマイ採り、舞茸採り。年2回
7月と9月には、ボランティアで、ダムから登
山道までの草刈り。県から頼まれれば、それは
日当つきだが、砥倉の雨量計までの草刈りもさ
れているという。

また、倉谷通いをしていると、年に四人程は不審行動をとる人を見かけ、保護することがあるそうだ。およそ山へ行く格好ではない老女、青年が、ひたすら山へ向かっており、声を掛けても辻褄があわない。見過ごせば死んでしまうことになるから、宥めて、警察へ連れて行くという。ヒトもおかしくなると、山奥へ行って身を隠さねば…というような動物の本能めいた物に憑かれるらしい。

本当に長い時間お邪魔してしまった。おそらく、私が父の昔話をじっくり聞いたことがないように、山下さんの息子さんも、こんな倉谷の話、熊の話を聞かれたことはないと思う。まして、銃の撃ち方、犀奥の詳しい地形を伝授されているはずもない。それどころか、来年から息子さんの長期の単身赴任、孫の遊学が始まり、山下家の男は、山下さん一人になるそうだ。

昔、生きる技術は、親から子へ、孫へ、見よう見真似で伝えられていった。村という共同体の村をあげての行事の中でも、生きる知恵が譲られていった。今、家族は生きるために、ばらばらで暮らし、ばらばら暮らしを可能にする「便利さ」は技術も知恵も伝えてはいかない。

共同体を作るはずのヒトが今では、無干渉を好み、ひき籠もりにもなり、生殖本能があるはずなのに、結婚もしたがない。「技術や知恵」とともに、何かが伝わらなくなってしまったのであろう。

不便ゆえに「技術と知恵」の宝庫であった山の暮らし、見よう見真似の中で伝授されていたそれらは、もう、山の語り部の記憶をたどるのみになろうとしている。

力丸 茂穂さんの調査

